

第5回8020童話賞

児童生徒の部「最優秀賞」作品

「青依の5日間」
あおい

中学 1年生

私、青依は今日から5日間おばあちゃん家で寝泊まりするんだ。

私のおばあちゃんは七十九才。

だけとまだまだ元気で、毎日畑に出ていろいろな野菜を作ってる。

「おばあちゃん。ヤッホー。」

「おや青依。いらっしやい。そろそろお昼だから家が上がって待っててちょうだい。」

「はーい。」私はこんなおばあちゃんが大好き。

「青依。食べようか。」

「うん。いただきます。」

「どうぞ。」

今日のごはんはたくあんとお米とキャベツたっぷりのとんかつ。

「おいしいー。」

「本当かい。ありがとう。」

そういえばおばあちゃんは入れ歯。

入れ歯といってもおばあちゃんの口の中にはおばあちゃん自身の歯が残っているから、部分入れ歯ってやつらしい。

おばあちゃんはたくあんが大好きでいつものように食べてる。入れ歯でも自分の歯があるって健康なんだからすごいと思う。

私の妹なんかチョコとかガムとかが大好きで、小学一年生なのに銀歯がいっぱい。

私だって一回むし歯になった事あるのに、おばあちゃんってすごいなあ。とおいしそうにたくあんを食べるおばあちゃんを見て思う。夜になるとおばあちゃんは入れ歯をキレイに洗う。

そして

「おまえのおかげでわしは毎日好きな物がおいしく食べれるよ。ありがとう。」

と入れ歯に話しかけるように言う。おばあちゃんを見てると歯って大切だなんて思う。

だから今日は夜だけで二回も歯をみがいた。

次の日の朝、いつものように朝ごはんのたくあんを食べるおばあちゃんがいた。

「おや、起こすのがかわいそうだから先に食べてたよ。」

おばあちゃんが言った。

「ううん、平気。おはよう。」

私はいすにすわり、食べ始めた。朝のワイドショーを見ていると

「ガリッ！」

と言う音がした。おばあちゃんの口から……。

「おばあちゃん、だいじょうぶ？」

今日、収穫した野菜に小石がまざってたみたいで、入れ歯は少しかけてしまっていた。

いそいで近くの歯医者さんに行くこと

「あーけっこうかけちゃいましたねー。」

と歯医者さん。

「少し、時間がかかりますんで、おあずかりします。」

そういつて歯医者さんがおばあちゃんの入れ歯を持っていった。

歯医者さんの名前は落合さんといってメガネをかけたやさしそうな男の人だった。

私はおばあちゃんが悲しそうに下をむいているのを見て言った。

「あっあの、入れ歯っていつぐらいに返って来ますか。」

「うーん。これぐらいだと三日間ぐらいですかね。」

「そうですか……。」

おばあちゃんがヨタヨタ歩いているのを見て、私はささえるみたいに歩いて帰った。

その夜の夜はおばあちゃんの大好きなたくあんがなかった。

入れ歯がなかったから。

今日はシンプルなおかゆだった。

今まで元気だったおばあちゃんが嘘みたい
に小さくてかよわく見えた。

食べたい物が食べれないってつらいんだな
あ。入れ歯がないとたいへんだなあと思った。

つぎの日もおばあちゃんはどうかない顔をし
ていて、畑にも行ってなかった。

おばあちゃんは編み物も好きで昔、私にピン
クのマフラーを作ってくれた。

今でも雨で畑に行けない日はやっている。

なのに今日はぜんぜん手が進んでいなかった。
私はおばあちゃんのためにたくあんを細かく
刻んでおかゆにまぜてあげた。

すぐよくこんでくれたけど、まだ入れ歯が
恋しく思っているみたいだった。

つぎのつぎの日、電話があった。歯医者さ
んの落合さんからだ。

「明日の風ごろには出来上がりですよ。」
と言われ、おばあちゃんはどううれしそうだった。
私は少しホッとした。

今日出来上がると言われたおばあちゃんは
朝から少しソワソワしていた。とっってもうれ
しそうだ。

そして、午前十一時にはしたくを始めてい
た。少し早く行くと言いつつ十一時半にはも
う受付を終えて待合室にいた。

そして予想より早く前の患者さんが終わったた
め、十二時より早く診療を受けた。

「あっ。こんにちは。もう出来上がってます
よ。はい。どうぞ、お大事に。」

こうしておばあちゃんに歯がもどって来た。
その後、家で食べたたくあんがおいしかった
のは、おばあちゃんがおいしそうに食べてた
からだと思う。

その夜、おばあちゃんはキレイに入れ歯を
みがいて歯に話しかけていた。

「よろしくね。」と。